

消防団について

「いやいやながら始めてみて、いつの間にか二〇年」

甲府市消防団相川分団第三部

甲府市消防団相川分団は山梨県甲府市のうち、北部の市街地から山岳部を担当している消防団です。ちょうど昨年NHK大河ドラマ「風林火山」の舞台となった武田神社（武田家屋敷）周辺とその北側の山が活動範囲です。甲府市北部の新興住宅街と山林を守っている形になります。

相川分団には六つの部があり、団員は全部で八五名。その中で第三部は四名の団員です。消防団は有志が適当に集まってやっているとされている方もいるでしょうが、定員が決まっています。それを維持することが求められています。基

本的に、活動はこの「部」を単位にして部の詰め所を拠点に活動しています。第三部にもちゃんと消防車が一台あります。とはいっても、いろいろな装備を載せられるように改造した赤いトラックの荷台に小型の消防ポンプを載せたものです。私は、この第三部で二〇年活動しています。

なぜ入ったのか

本当は入りたくなかったのです。今の団員の中で自分から希望して入った人はいません。私の父も消防団員でした。私が入ったときには、とうの昔に退団していました。親戚が入っていました。その親戚が退団するときの身代わりで入ら



山村 武敏

山梨県観光部国際交流課
国際協力担当 課長補佐

【やまむら たけとし】1959年生まれ。82年山梨県庁入庁。山梨県が姉妹提携している韓国忠清北道に1年間勤務経験あり。2児の父親。趣味はパソコンと自転車。

ざるを得なかったのです。その時私が抱いていた消防団のイメージは、意味もなく集まっては酒を飲んでよくわからない集団というものでした。冬に近くなると、「消防車」という赤いトラックに乗って、火の用心のスローガンを騒いで町内を回っている人たち。入団しても何のメリットもない。でも、親も入っていましたし、親戚から懇願されている。地域に貢献しなければならぬ公務員だし。もう、入るしかなかったのです。そんなわけで、最初は詰め所にいくのがいやでたまりませんでした。

消防団活動

消防団は全国にあり、火災出動以外



甲府市消防団相川分団第三部のメンバー

の活動形態はさまざまです。私の部は、月に一回の消防車や消防ポンプの点検と事務連絡や打ち合わせのための定例会があります。それ以外に、秋の火災予防運動と春の火災予防運動が各一週間あります。秋の火災予防運動は毎年一月九日から始まります。一一九番だから

です。春は、三月一日から始まります。これらの行事のたびに酒を飲むのです。酒の弱かった私は、大変苦労しました。上の人が帰るまでは帰れないという雰囲気がありました。私がえらくなったら、こんなことはよして、飲みたい人が飲んで帰りたい人は帰れるような第三部にしたいと思ったものでした。

山火事

都会にいたる人たちは、別に消防団がいなくても消防署があるのだから問題ないだろうと思っているかも知れません。実はそうなのです。地域にもよりますが、町中の火事では消防署の消防車が一番先に現場に到着します。一一九番の電話は消防署に繋がるのですから当然です。消防署は消防団にも連絡をくれます。

ですが、今時、会社勤めがほとんどの消防団員は、詰め所に集まるのも大変です。たまたま近所の火事にいち早く気づいた消防団が消火栓を確保すると、装備も訓練も充実した後から来たプロの消防士には、かえって活動の妨げになる場合もあります。結局、消火活動のサポートや周辺の交通整理、消火後の片付けなどが主な仕事になります。

ところが、山火事は違います。山には水がありません。消すには胸突き八丁の斜面をよじ登り、くすぶっている火にスコップで土をかけたたり、ジェットシュー

ターという水が入った大きなリュックにつながった水鉄砲みたいな物で、小さな火を消したりの人海戦術になります。プロの消防士だけではとても足りないのです。どうしても消えないときは、防災ヘリからの空中散水、あるいは、あればの話ですが、近くの沢を流れる小川などから水を消防ポンプで吸い上げる必要があります。近くといっても現場から一〇〇メートル下で、道もないという状況がほとんどです。この時、消防車に載せた小型消防ポンプが威力を発揮します。みんなの手で沢まで降ろして、そこから水を上へ押し上げます。うちの消防車が立派なポンプ車ではなくて、小型ポンプを載せたトラックだったのはこんな訳があったからでした。

山火事の消火作業は非常に危険です。急に風向きが変わると煙に巻かれることになります。こんな時は素早く風上へ移動する、などということはできようもなく、頭を低くして耐えるしかありません。また、鎮火には時間がかかり、時には数日かかることもあります。しかし、苦労してやっと鎮火したときは、体はへとへとに疲れているのですが、山火事を克服したという達成感や被害が拡大せずすんだという安堵感がありました。

小型ポンプ操法大会

特に家火事においては現場に到着した

競技前の配置。ホースなどの位置関係は厳密に決まっています



競技は平坦な広場にポンプと巻かれた二〇メートルの消火ホース三本がきれいに置かれ（位置はセンチ単位で決められていて、違ってると減点対象です）その後ろに水槽に入れた水があります。消火ホース三本を延長するところ、ようどいい距離に、

ら水源の近くにポンプを設置し、そこから消火ホースを延ばして放水するという作業を素早く行わなければなりません。その作業をいかに素早くするか競う大会がポンプ操法大会です。相川分団では毎年各部が持ち回りで出場しています。指揮者とホースを運ぶ係、ポンプを操作する係など四名で一チームを作ります。私も一二年前に出場しました。これもできればやりたくない行事です。大会三カ月くらい前から毎週（二回程度、夜の練習を続けなければならぬからです。中には、これに消防団生命をかけていて、一年中練習をして優勝を目指している消防団もあるようです。私は機械員（ポンプ操作担当）に指名された時は、何でこんなことをしなければならぬのかと思いました。

的になる「火点」が置かれます。操作開始から火点に水が当たるまでの時間と作業の手際よさを競うのです。こんな理想状態で競技して実際の役に立つのだろうか。それに消防団が家火事を本格的に消すことはほとんどないわけです。意味のないことを繰り返し練習するのは納得がいかないけれど、指名された以上はやらざるを得ません。

競技ではタイムもさることながら作業の確実性や動作の美しさやきびきび感が採点対象になります。ホース接続の確認作業など確実性の確保と並んで、気を付けしたときの指のそろえ方など細かいところまで注意しなければなりません。最初は、前年の大会のビデオを見てどのようになればいいのか勉強し、最初の整列のところから練習し始めます。練習と

いつでも大会が近くなれば実際に放水して練習します。水道が使えて競技に必要な約一〇〇メートルの長さがとれる場所を確保しなければなりません。

相川分団は、毎年近くの体育館駐車場を借りて練習します。最初はいやでいやでたまらなかつた練習がタイムを計り始めると、だんだん短縮することがおもしろくなってきて、最後には追加練習を求めるようになるほど打ち込んでしまつたのです。この練習中一〇〇回以上ポンプ操作を繰り返した結果、第三分団の中で一番ポンプに精通した団員になつてしまいました。大会終了後は、火事があつても私が詰所に着くのを待つて消防車が出発するという良いのか悪いのかわからない状況も発生しました。このようなこともあり、消防団活動のやりがいも徐々に出てきました。

部長になつて

さて、これまでに多くの火事に出動し被害の拡大を防いできたのですが、上の人が次々に退団していく際、いつも問題になるのが、新入団員の確保です。甲府市の組織ですから、退団者が続出して誰もいなくなつたということは許されません。そこで、地域の若者を勧誘をするのですが、なかなか入ってくれません。相手がいるであろう夜に自宅に行くのですが、両親が息子をかばつたりで本人と

選手の都合に合わせて、夜の練習がほとんどになります（写真上）
先輩の指導を受けながら手前の指揮者と3人の団員が競技を行います（写真下）



球温暖化の影響か、雨が一時期に集中して降り、周囲の山に降った雨が川に集中して、堤防を越えそうになる場合が増えました。地域を巡回をしているときに誤って川に落ちれば命はあります。堤防に土嚢を積むときは、当然、雨合羽を着て作業するのですが、汗をかいたので着ても着なくても体はびっしょりです。そんな努力をしても、川の近くの農地や家が水害の被害に遭うと申し訳ない気持ちになります。消防団員は台風情報を見ると、この地域がコースから外れるよう力をこめて祈っているのです。

会うこともままならない場合もあります。昔と違って農業や自営業の人はほとんどおらず、地元への帰属意識も希薄な人が多くなったので仕方がないのかもしれない。しかし、不可解なのは特に元消防団員の子供を勧誘すると親が非協力的であることです。自分たちがいた時代の消防団を覚えていて、子供に同じ経験をさせたくないのでしょうか。集まれば酒を飲み、外から見ると何をやっているのかわからないという消防団のイメージを変え

る必要があるのです。そこで、訓練等終了後の反省会では事務的な連絡が終わったら個人の都合によって自由に帰ることを再確認し、遅くまで酒を飲むことはしないよう話し合いました。また、地域とのつながりを重視し自治会等の催しには積極的に参加することとしました。消防団は酒飲み集団ではなく、地域に貢献していることを少しずつでも理解してもらおうと努力しています。地域に理解され感謝されるような組織にならないと、地域の安全も守

水害

れません。ですから、特に地域の防災訓練には積極的に参加しています。また、火事などの有事の際以外は、仕事の予定なども考慮しながら消防団行事に参加するようになってきました。

消防団は水害にも対応します。台風などがきて、地域で水害が発生しそうになると、詰所に待機し、定期的に河川の水位を監視したり、土嚢を作って堤防の決壊を防ぎます。近頃の夏の雨は地

地震について

東海地震は、一八五四年の安政東海地震から一五〇年以上発生していません。それまでは一〇〇年から一五〇年を周期に発生していたのです。いつ来てもおかしくありません。もちろん静岡県は非常に大きなゆれを受けるでしょうが、山梨県でも県南部を中心に大きなゆれが予測されています。

平成一七年度の山梨県の地震被害想定調査では、甲府市北部でも震度五強から六弱が想定されています。もし来たらどうなるでしょう。第三部が担当する地域でもおそらく複数の火災が発生するでしょう。そのとき、甲府市全体を管轄する消防署の消防車は来てくれるでしょうか。武田神社のすぐそばにある消防署の支所は近々なくなってしまう。消防団だってひとつの火災に対応するのがやっとです。そうなると、そのほかの火事は地域の人が消すしかありません。本当に消せるのでしょうか。自宅の最寄の消火栓がどこにあるか知っていますか。普通はそのすぐそばに消火ホースなどを入れた器具庫が備えてあるのですが、本当に皆さんが知っているのでしょうか。そこで、毎年防災の日前後に自治会と協力して消火栓の使い方と自宅での消火器の使い方を講習しています。広い場所があれば、ついでにポンプ操作を実

演して、消防団活動をPRしています。驚いたことに消火器のある家庭は結構あるのですが、ほとんどその使い方を知りません。使ったことがないといえはそうなのでしょうが、いざというときのために経験していることは重要です。消防団は消防署から訓練用の水消火器を借りてきて住民の方実際に使ってもらっています。大きな火事になったときは、自分たちで消火栓を使って消火しなければなりません。大体、消火栓の蓋だってあけたことがないので、使い方がわかるわけがありません。消火器具庫に入っている消火ホースも配備された状態のまま、ロールケーキのように一本丸ごと巻いたままです。ホースは両端の金具を合わせて二つに折り、折ったほうの端から巻いていきます。こうすると、伸ばすときに片方の金具を踏んだままもう一つの金具をぐっと持ち上げると一瞬で解けます。

こうして消防団がまず実演するので、みんな「ほほー」と感心して見えています。その後、みんなが見様見真似でやってみるのですが、見本を見ていても消防団員の指導を受けながらでないと水は出ません。これが実戦なら、放水を始めるところには焼け落ちているでしょう。しかし、講習のあと、参加者から質問を受けたり、情報交換することにより消防団と住民の直接のつながりもできると

防災意識も出てきます。こういう講習を繰り返していけば地域の防災力は確実に向上していきます。

最初はいいやながら入った消防団。しかし、活動するにつれ、地域になくはない組織であるという実感が湧いてきました。公務員は民間企業と違い、消防団活動については応援してくれますし、地域に貢献する方法としてはよい選択ではないかと思えます。消防団に入ってもう二〇年になりました。そろそろ団員の更新代議を考へなければならぬ時期ですが、地域の防災のため一消防団員として一生懸命活動したいと思っています。

